就テハ、研究材料ヲ廣ク蒐集整理シタルニモ拘ラズ、當時欧洲滞留期間再度ノ延期満期シタル為メ、研究半途ニシテ中絶ノ止ムナキニ立チ到リ候。此点ハ著書 Sandro Botticelli ノ序文ニ辯明致シ置キタリト雖モ、學徒トシテ小生ノ遺憾ヤル方ナキハ勿論、從来世界ノ「ボティチエリ」研究中、最モ丁寧ナル研究ノ一タルヲ言明シテ憚ラザル小生ノ著述ノ學述的貢献ヲ完フセザル所以カトモ考ヘラレ候　大正十四年小生帰朝致シテ後、Sandro Botticelli「ロンドン」ニ刊行セラレ諸種ノ學術的批評欧米各國ニアラワル、ヤ、財團法人啓明會ハ是ガ價値ヲ認メ、且ツ小生ガ研究継續ノ希望ヲ容レテ「ボティチエリ」〔ママ〕ヲ中心トシタル文藝復興期ノ研究」ナル題目ノ下ニ研究費支給ヲ決定セラレ候　財團法人啓明會ノ支給スル研究費ハ左ノ如ク欧米諸國研究旅行費ヲ含ム

欧米諸国滞在及研究費（一ヶ月三百六十円トシテ一ヶ年間）

金四千三百二十円　旅行費　金三千円

合計　金七千三百二十円

以上研究継續並ビニ完成ノ目的ヲ以テ、小生儀昭和二年四月〔原文空白〕日ヨリ往復共満一ヶ年間欧米各国（ロシヤ、ドイツ、フランス、オーストリヤ、イタリヤ、スペイン、イギリス、北米合衆國、カナダ）ヘ出張致シ度ク、此段願上候也

昭和二年二月十六日

東京美術学校教授　矢代幸雄〔印〕

東京美術学校長正木直彦殿

矢代は帝室博物館から欧米各国博物館の調査も嘱託されて同年四月十四日出発、翌三年五月十一日に帰国し、復職した。

⑥ 松田権六の起用

昭和二年九月二十三日、松田権六が助教授に任命された。松田は明治二十九年石川県金沢市生まれ。同県立工業学校漆工科描金部卒業後本校漆工科に入り、大正八年に卒業した。同年十二月より同十年三月まで兵役（陸軍歩兵少尉）に就いた後、東洋文庫における楽浪漆器の修理に同十四年まで従事。その傍ら、東京市職業訓練所塗装科を受講し、浅井家具株式会社に就職。西洋塗装を修業しつつ自宅での漆器製作にも従事した。同十三年九月、第十二回農商務省工芸展覧会に出品した蒔絵手呂が二等賞を受賞、政府買上げとなり、翌十四年、フランス万国装飾美術工芸博覧会に出品、金牌を授与された。同十五年十一月、株式会社並木製作所（後のパイロット万年筆）に入所し漆工班主査となり、翌昭和二年九月に退職（顧問となる）。同月、本校助教授となり、漆工科蒔絵及び調漆実習を担任した。同三年二月二十五日、宮内省依嘱の御大礼御剣（即位の太刀）糸飾製作助手を命ぜられたが、これについて自著『うるしのつや』（昭和五十六年、日本経済新聞社）で、教壇には立たず、御大礼御剣の外装漆作業に専念して、大小の菊紋三十二個を完成させるのに二年半を要したと記している。昭和二年、第八回帝展に出品、初入選。以後、同展及び新文展、日展に同三十三年までほぼ毎年出品。その間、同四年特選、同五年推薦、同九年と十三年には審査員となり、同十八年に本校教授に昇格、同二十二年に帝国芸術院会員、同三十年に重要無形文化財（蒔絵）の保持者に認定され、同三十八年に東

京芸術大学を停年退官し名誉教授となる。

⑦ 黒田記念館起工式

昭和二年十月二十二日、本校敷地内に建設される黒田記念館の起工式が行われた。同日の『国民新聞』はその正面見取図を掲げ、次のように報じている。

故黒田子記念館
美術校内にけふ起工

去る大正十三年六月逝去したわが洋畫界の泰斗故黒田清輝子が臨終に際し子爵所有の不動産三分の一を美術事業に寄附する旨を遺言したのに基き遺言執行者樺山愛輔伯、久米桂一郎氏、打田辯護士等は不動産の換價處分を三井信託に委託し昨年末全部を處分する事が出來たので今春牧野〔伸顕〕伯を總裁に福原〔鎌二郎〕美術院長、正木〔直彦〕美術學校長、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、岡田信一郎その他の諸氏を委員として種々研究した結果、黒田記念館を建設して故子爵の遺作を陳列し美術並に古典藝術の研究に資する事になつた

記念館建設の場所は、美術學校構内　工費は十數萬圓、總建坪三百六十餘坪の不燃質建築とすることになり岡田信一郎氏の手で先月初旬設計も完了したので愈々今二十二日午後二時半地鎮祭を執行の上竹中組の手で工事に著手する事になつた

此の工事完成の上は維持費十數萬圓と共に美術學校に寄附して美術研究に資する筈であると〔下略〕

この記事に記されているように、当初は黒田記念館を本校の所属とする案もあったが、帝国美術院附属に決定し、昭和五年に至り、ここに同院附属美術研究所が置かれた。なお、黒田記念館の建物は旧東京府美術館、本学陳列館（422頁参照）とともに岡田信一郎設計の美術館三部作と言われる。

⑧ 无型と工人社

昭和初期の工芸界の発展に大きな役割を果したグループに无型と工人社が挙げられるが、両方とも本校関係者が中心となった団体である。

无型は大正十五年六月、高村豊周らを中心に結成され、創立時のメンバーは高村豊周、杉田禾堂、山本安曇、豊田勝秋、西村敏彦、佐々木象堂、内藤春治（以上鋳金）、北原千鹿、村越道守（以上彫金）、鈴木素興、加藤居山、太田自適、佐藤陽雲、田口啓次郎、松田権六、山崎覚太郎、吉田源十郎（以上漆芸）、広川松五郎、渋江終吉（以上染織）、藤井達吉（雑工芸）、渡辺素舟（評論）の二十一名、本校卒業生は十二名、その内当時本校教官は五名あり、いずれも新進気鋭の作家である。その後、松田権六が退会、磯矢陽が同人となるなどがあった。昭和二年一月、高村の私費刊行で謄写刷りの『无

『无型』創刊号表紙